

---

# ぐるぐる

神崎 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ぐるぐる

【Nコード】  
N5557BA

【作者名】  
神崎 翔

【あらすじ】  
平凡な大学生雪雄が、妖怪退治のできるものぐさ大学生怜と出会う。人の心から生み出されると言われる妖怪たちと遭遇していく中で、二人は様々な人と出会い、成長する。  
真に恐れるべきは妖怪自身なのか、それとも人の心か。

## 第一章 「雪雄と怜」 (一)

大学1回生の春。

講義を終え、頭上高くに立ち並ぶ桜に目を遣りながら、食堂へ向かった。

食券販売機の前で財布を広げ、千円札が一枚入っていることを確認し、日替わり定食のボタンを押した。

慣れた手つきで食券を抜き取り、カウンターのおばさんに渡す。流れ作業のようにひとつずつ皿や椀を受け取り、水をくんだ後、できるだけ人の少なそうな席を探した。

弁当箱のふたも開けずに何やら携帯電話の画面を見せ合っている女の子たちや、中央の円卓を囲って俺のカツが大きいだのハンバーグの方が旨いなどと異様に盛り上がっている男たちの間を通り過ぎ、窓際の二人掛けテーブルにトレーを置いた。背後では先ほどの男たちの中の一人がカレーライスのコストパフォーマンスについて熱弁している。

横にある全面ガラス張りの窓から眺めると、桜の花は何かの印章で見たそれと本当に同じ形をしているんだとはじめて気付かされた。

食堂を何時に出ればちょうど良い時間に次の教室に入れるかなどと考えながら食べていると、ふと前方から何ものかの視線を感じた。反射的に前を見ると、その視線の主はそれに気付いたのか視線を一瞬下に落とした後、桜の木の方に目を向けた。

ここには毎日通っているが、サラリーマンが通勤路の切符を毎日買うように日替わり定食の券を買っていたので、向かいの男が食べているカレーライスがなんとなく気になった。

再び男がちらりとこちらに視線を向けたので、今度はこっちの方がバツが悪くなって視線を桜へ向けた。なんだか妙な感じだ。さつさと目の前の皿を空にして立ち去ればよかったのだが、ここを出ても講義の時間まで特に行くところもないので、意味もなく携帯電話を開いたりしながら、冷めた味噌汁を少しずつすすった。

男は早々にカレーライスをたいたらげ、ガサゴソとかばんの中をあさっては、何を取り出すわけでもなく、またぼんやりと窓の外を眺めていた。

視線の主への興味もいつの間にか薄れ、背後で「うどんは二百円、カレーライスは二百九十円、カレーうどんは三百九十円。これっておかしくないか？カレーうどんを頼むくらいならうどん二杯食べるだろ」という円卓の男に対して、他の男が「ルーが百九十円すると考えたら別に妥当じゃないか」と反論しているのを、妙に納得しながら聞いていた。

すると、不意にガタリという椅子の音が聞こえ、先ほどの視線の主が僕の横に姿を現した。

「うどんの出汁はタダじゃない。カレーライスが特別安いだけなんだ。」

普通なら変なやつに絡まれたと後ずさりするところだろうが、背後の論争を聞き届けていた僕には意味がよくわかった。

「だからカレーライスを食べてたんですか？」

「いいや、カレーうどんは嫌いなんだ。飛び散るから」

やっぱり変なやつに絡まれたらしい。

これ以上会話を掘り下げる意味も感じず、無愛想に「そうですかと答えた。」

「それと、君、アブないよ」

視線の応酬おしゅうのことなら、先に見たのはそっちだろうと、この無礼な男に言い返してやりたかったが、まだ入学して間もない自分が目の前の上級生だか分からない男に齒向かうのは得策ではないと思っ

た。  
「そうですね」

「君のかばんの中」

そう言うと男は僕のかばんを指さし、こくりと頷うなずいた。

「かばんの中が危ない？ どういうことですか？」

先ほどのわずかな苛立いらだちは収まったが、まだ僕が危険人物であると指摘されていることには変わりないと思直し、再び眉間みけんにしわを寄せた。

「その中に何かいつもと違うものは入ってないか」

バッグの中には財布、鍵、筆箱、教科書、無造作にプリントを放り込んだクリアファイル……と思いを巡らせながら、ひとつ異質な  
ものがあることを思い出した。

「これですか？」

かばんから取り出すと、男はおもむろにそれを手に取った。

「……………」

さっきの講義の時間、机の上にあったカエルの形をした置き物。高さ十センチほどの木彫りのカエルで、深緑色に塗られている。

男はその置き物を指でコツコツと叩いたり、ひっくり返したりしながら、目を凝らして見つめている。  
変なやつという思いが確信に変わった。

## 第一章 「雪雄と怜」 (二)

二分間ほど黙ってその置き物をこねくり回した後、男はようやく口を開いた。

「どこで見つけた？」

「昼前の講義、高層棟の一 二教室で、たしか席は後ろから二番目です。誰かの忘れ物だろうから教務課に届けようと思ってたんですよ」

「そうか。これ、俺にくないか？」

「別にいいですけど、なんでです？」

「うん、くれ、というよりは、引き取ると言うべきか」

「持ち主を知ってるんですか？」

「いや、持ち主は知らないし、届け出たところでたぶん名乗り出ることはないだろう。これは意図的に人の手に渡るよう仕向けられたものだ。悪意があってね」

なんだかよく分からない話になってきた。早々にこの場を切り上げたいと思っただが、残りの休憩時間を意味なく過ごすよりは、まだこの話の続きを聞いたほうが有意義であると、知らぬ間に判断したのでろう。

「悪意って、どういうことですか？」

「これは俺の専門外だが」

そう言っただけ置き物を掌でぐるりと一回転させ、話を続けた。

「これは人の仕業だ。この置き物は、自分の不幸を人に置き換えるための媒体だよ。つまり、元の持ち主が交通事故に遭う運命を背負

ついていた場合、その運命を拾い主に押し付けることができる。別に不幸なことばかりとは限らないが、幸福を見ず知らずの人に分け与える人間がこの世にいると思うかい？」

口元にうつすら笑みがこぼれているように見えて、薄気味悪くなつた。しかし、この不幸をもたらすという置き物を引き取るとは？ 僕を救おうということか、それとも、不幸でなくて幸福がまつた置き物なのか。

「ちょっと待つてください。でも、そんなものが学校にあるなんておかしいですし、大体なんで分かるんですか？ やっぱりこれ学校に届けることにします」

「君がそうしたいなら俺は止めない。今君はなんで分かるって言ったね。俺はこういう事件というか、事象に興味があつてね。色々調べてるんだ。今回の件は専門外だが、対策はもう思いついてるんだ」「なら教えてください、その対策を」

「君には教えない。いや、正確には教えても意味がない」

なんだかこの男のものが癪に障<sup>かん</sup>つてきて、どうしても良くなってきた。この忌々しいカエルの置き物も、この男に渡すことで自分が負けてしまうような気がして、意地でも渡すまいと思った。

「じゃあ、そろそろ次の講義がはじまるんで」

講義が始まるまでにはまだあと十五分ほどあるが、今の自分にとってはこの空白の時間の過ごし方なんてどうでも良かった。

トイレを乱暴に手に取って、まだ自分の前に立っているその男を置き去りにして、食堂を後にした。

うつうつとしながら午後の講義を受け、開始時間にはきっちり綴<sup>と</sup>じ目を広げていたノートにも、終了時間になってみると真っ白いのペ



ージにうつすらとよだれの後が残っているだけだった。

帰り道、自転車のペダルを漕ぎながら、今日は何とも後味の悪い一日だったと振り返った。午前中の講義でフロイトがどうのとメモしたのは覚えているが、結局は食堂に現れたあの男の顔に掻き消されてしまう。ぼうつと外を眺める無気力な顔、ニヤリと笑う口、すべてが腹立たしいものだった。

男が着ていたTシャツの腹に「無礼者」と書き込んでやりたいと思ったが、Tシャツの色が黒だったことを思い出し、より力強くペダルを漕いだ。

家に帰ってから無造作にバッグを放り投げ、ベッドにごろんと寝転がり、宙に向かつて足を組んだ。また男の顔が思い出されたが、意識の外に放り投げた。思惑を意識から投げ出しているうちに、知らない間に眠りについてしまった。

ふと意識を取り戻すと、携帯電話の青色の点滅が目に入った。開くと、「新着メールあり1件」と表示されている。

入学して間もない頃に、サークルや部活動の新歓コンパがあり、わけもわからず多数の人とメールアドレスを交換した。そのうちの半分ほどが顔と名前が一致しないものだったが、あわよくば女の子からのメールであってほしいとわずかに期待した。

開いてみると、母さんからのメールだった。

「件名 元気にやっていますか？ 今日家族で花見に行きました。雪雄の大学も桜が綺麗に咲いていますか？また帰ってきなさいね。みんなで待っています」

メールには写真が添付されていて、左から母さん、妹、父さんが

並んでいる。満開であろう桜をバックに撮影しているが、三人の顔が近すぎてよく見えない。母さんの顔の左端が欠けていて、素人目にもずいぶん不細工な構図である。

期待していた分、親からのメールだったことに落胆し、そのまま画面を閉じた。

家族とはそれなりに仲の良い方だったが、逆にそうした馴れ合いに嫌気がさしたことも、実家を出て遠くの大学に進学することを決めた一因だったのかもしれない。

間もなく今度は友達から着信が入り、最近読んでいる漫画の話や始めたばかりのバイトの話などで知らぬ間に夜を迎えてしまった。風呂に入るのもおっくうになり、今日はシャワーで済ますことにした。

## 第一章 「雪雄と怜」 (三)

次の日の朝、いつも通り自転車に乗って、大学へ向かった。

特にクラス分けというものがなかったため、同じ学年でも関わりのない人が多く、たまにすれ違う顔見知りには軽い挨拶程度のことですれど、基本的には単独で行動していた。

それを寂しいとも恰好良いとも思っているわけではなく、ただ楽しかった。くだらない会話をして無意味な時間を過ごすよりは、一人で物思いにふける方がよっぽど有意義だ。昨日のカレーうどんの話のように……そんなことを考えていると、またあの無礼な男が頭をよぎり、すぐに他の話題に変えた。

午前の講義はそれなりに身が入り、終了間際のレポートもいち早く書き上げ、桜を見上げながら食堂へ向かった。今日は災いに巻き込まれたくないと、近くのコンビニで昼を過ごそうとも考えたが、あの男のために労を費やして歩くのがまたばかばかしいと感じ、気が付けばいつもの食券販売機の前に立っていた。

いつも通り脇目もふれず日替わり定食の券を買い、おばさんに差し出す。いつもと同じ数の皿や椀を受け取り、空いているテーブルを探す。やっぱり窓際が落ち着くので、昨日と同じ席を選んだ。

椅子に座るなりアジフライを頬張ったところで、背後から聞き覚えのある声があった。

「どうだった？」

昨日の男だ。失敗した。やっぱり来るんじゃないかった。

口に含まれたアジフライをわざとゆっくり味わい、ゴクリと飲み込んだ後にひと呼吸置いて答えた。

「別になにも」

「そうか」

そう言うのと、男は僕より二つ離れた椅子に座り、カレーライスを食べ始めた。今日はこちらに背を向けている。まだ味噌汁が半分ほど残っていたが、もう厄介事には巻き込まれたくない一心から早々に席を立った。立ち去り際に男の方をちらりと見たが、男は空にしたカレーライスの皿の前でぼんやりと外を眺めていた。

午後の講義を終えて、帰り途につく。今日は気分が良かったので、散策がてらいつもとは違うコースを走った。

いつもより少し遅れてアパートに着き、ポストに入っていたわけの分からないチラシをぐしゃっと手に取り、部屋にバッグを放り投げ、ベッドに転がった。

カーテンを開けて外を見ると、夕日が沈みかけ、夜の闇と夕日のだいだいいろ橙色が美しいグラデーシオンを成している。信号待ちをしている三台の車と、別れを告げて別々の方向へ進む自転車の学生たち、この都会でもなく田舎でもない光景が、いつも通り額縁の中に描かれていた。

カーテンを閉めると、想像以上に部屋はうす暗く、明かりを点けようとした瞬間、忘れ去れていたバッグの中のある物の存在を思い出した。バッグをあさり、手に当たった独特の木の触感でその物を探り当てた。

昨日男がしていたように、指で叩いたりひっくり返したりしてみたが、何ともない。よくよく眺めていると、二本足で立ち両手をあげたカエルの姿が妙に不気味に感じられて、ベッドの上へ放り投げた。直後もう一度その怪しげな置き物を手に取り、机の上に背中を向けて置いた。窓から差す僅かな夕日が、その置き物の背中を不気味に照らした。

なぜ今日学校へこの落し物を届けなかったのかと後悔した。忘れていた、存在を。いや、もしかしたらそうではないかもしれない。あの男の言っていることが本当だとして、学校へ届け出てしまったら、何か起こったときに取り返しが見つからない。やっぱり返してほしいとは申し出ることができない。

つまり、無意識に保険をかけていたのだ。あの男の言葉をにわか信用して……。

そんなことを考えていると、いよいよこの置き物が不気味に感じられ、窓の外に放り捨てたくなった。視界に入れたくない。そもそも僕はなぜこんな物を拾ったのだろう。その動機すら今思い出そうとすると曖昧だ……。

ジリリリリリ！！

不意に携帯電話が鳴った。みつともなく体をビクツと震わせ、電話を開く。父さんからだ。珍しい。妹からたまに連絡はあったが、父さんから連絡があったことは、記憶の許すかぎりない。

「もしもし」

「雪雄か」

しばらくの間言葉が途切れていた。電波が悪いのかと電話機を離したり近づけたりしていると、ふうつと息を吸う音がした。

「母さんが死んだ」

嘘だ。昨日家族で花見に行ったはずだ。あんな元気に、笑顔の写真を送ってきたじゃないか。

「雪雄、聞いてるか。今日の夕方五時頃だ。急に倒れて救急車で運ばれた。脳卒中らしい」

父さんは冷静な口調で話しているが、同時に緊迫した表情も読み取られ、なんとか平常を保っていることがうかがえる。

母さんは本当に死んだんだ。

「明日葬式をやる。お前、帰れるか？」

今からすぐ帰ると告げ、通学に使っているバッグに下着とTシャツを一枚突っ込み、アパートをあとにした。両手をあげた奇怪な力エルの置き物は、机に置いたまま……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5557ba/>

---

ぐるぐる

2012年1月15日03時49分発行